

第三十四回和辻哲郎文化賞 一般部門受賞作

三浦 篤 著『移り棲む美術 ジャポニスム、コラン、日本近代洋画』

(2021年2月28日刊 名古屋大学出版会)

三浦 篤 みうら・あつし

東京大学大学院総合文化研究科教授

1957年(昭和32年)5月20日生まれ 64歳 島根県大田市出身

専門は、西洋近代美術史、日仏美術交流史

1981年3月、東京大学教養学部教養学科卒業。1984年3月、東京大学大学院人文科学研究科美術史学修士課程修了。1985年4月に同博士課程進学し、10月フランス政府給費留学生として渡仏。パリ第4大学美術考古学研究所で西洋近代美術史を専攻する。1989年3月、東京大学大学院人文科学研究科美術史学専攻博士課程単位取得満期退学。1990年4月、日本女子大学人間社会学部文化学科専任講師。1993年4月、東京大学教養学部助教授。1996年4月、東京大学大学院総合文化研究科助教授。1997年1月、パリ第4大学美術考古学研究所で博士号取得。2006年4月、東京大学大学院総合文化研究科教授となり、現在に至る。2007年(平成19年)1月、パリ第4大学招聘教授(8月まで)。

主著に、『まなざしのレッスン①西洋伝統絵画』(東京大学出版会、2001年)、『近代芸術家の表象—マネ、ファンタン=ラトゥールと1860年代のフランス絵画』(東京大学出版会、2006年)、『名画に隠された「二重の謎」—印象派が「事件」だった時代』(小学館、2012年)、『往還の軌跡—日仏芸術交流の150年』(共編著、三元社、2013年)、『まなざしのレッスン②西洋近現代絵画』(東京大学出版会、2015年)、『西洋美術の歴史、19世紀：近代美術の誕生、ロマン派から印象派へ』(共編著、中央公論新社、2017年)、『エドゥアール・マネ 西洋美術史の革命』(KADOKAWA、2018年)など。

受賞のことば

思い起こせば、留学先で新資料を発見して最初の論文を書いたから30年経ちますが、日仏美術交流史研究の糸口が見えてきたときの興奮はいまだに忘れられません。それ以来の成果を集約した本書が、多くの学問分野を横断した知の巨人の名を冠した賞を賜るのは驚きでしたが、大きな名誉と思っています。なぜなら、19世紀後半の日本とフランスの美術が互いに刺戟し合い、変容を遂げていった有り様を、歴史と文化に関わる広い視野のなかで示そうと試みたからです。それは美術作品の主題と造形のなかで、異文化が交差する軌跡を見定めようとする仕事でした。また、本書が一般部門の受賞作であることもうれしく思っています。なぜなら、専門的な学術書の体裁をとっているとはいえ、芸術と文化に興味のある普通の知的読者にとっても面白く読める構成と明晰な文章を心がけたからです。美術史が他の諸分野に、一般の地平に開かれるひとつの契機となれば幸いです。

《選考委員評》

阿刀田 高

甲乙つけ難く

まず初めにこの文化賞の選考のため多くの推薦作品の中から最終候補を選定して下さった方々に、そしてそれを支えたスタッフ諸氏に敬意と感謝を申し述べたいと思う。例年のことではあるが、本当にすばらしい作品が残った。甲乙つけ難い。とりわけ私の知識の不足する分野はどう考えたらよいのだろうか。つたない選考作業をお許しいただきたいと願う。

受賞作『移り棲む美術』は学術書に属するものなのだろうが、とても読みやすかった。そしておもしろい。たくさんの図版がそえられていて（絵画はサイズを縮小されては印象が大きく異なると承知しながらも）蒙を啓かれるところが多い。日本美術がフランスの美術家を刺激し、それがまた日本に帰って新しい流れを創ったこと、そこにラファエル・コランや黒田清輝等の関わりが深かったことなどは浅薄ながら知っていたけれど、その詳しい、本当の意味を知らなかった。本書に親しむうちにそれが見えてくる。そこにあるのは文化の“影響”ではなく（影響には一方が与える印象が濃い）受け手がおのずと発達させ“作り変える”とか“洗練させる”とか、もっと主体的なものがあることなど、私の仕事にも役立つ変化をいただくこともできた。ただこれを美術書としてどう評価してよいか、浅学の者として迷うところもあったが、選考会の席でそれが杞憂と知り諸手をあげて決定に従った。

『暁の字品』も力作で、文化賞にふさわしいものと読んだが、すでに他の有力な賞の受賞作であることを知り、少しく腰を引いてしまった。『林達夫 編集の精神』も書籍の編集の大切さがあらためて問われている今日このごろ多分に示唆的であると考えたが、現在の若い読者にはどうか、少し弱点があるのかもしれない。『いのちの原点「ウマイ」』は現実の命とイマジネーションとしての命を“ウマイ”という言葉を軸に人間の本質とからめて追究する民俗学的内容に（とりわけ小説家として）感銘した。『村野藤吾と俵田明』も「建築は時代の思想を含んで激変しているんだ」とわかり、現在にふさわしい力作と読み終えた。

辻原 登

文化の作用と受容の問題は、科学はもちろん他の分野でも頻繁に論議されていることで、それは私達の精神文化、内面と行動に大きな影響を与えている筈だ。

日本に限る必要はないが、特に我々日本において、その問題は文明開化以来、大きなテーマであったが、作用と受容のダイナミズムについて、本格的な研究が始まったのは、おそらく戦後、島田謹二を中心とする東京大学に設けられた「比較文学・比較美術講座」だろう。その講座から芳賀徹、平川祐弘、高階秀爾等を筆頭に、杉田英明、稲賀繁美と多くの碩学が生まれ、我々の文化の自己認識の向上に大きな貢献を成して来た。

三浦篤氏もまた、その学脈に列なる俊英であり、今般、和辻哲郎文化賞の荣誉に輝いた『移り棲む美術 ジャポニスム、コラン、日本近代洋画』は、「比較美術」分野における優れた成果の一つである。

専門的な評価は良くするところではないが、何よりも学術書でありながら、誰が繙いても、分かりやすく、見て美しく、楽しい。それは、和辻哲郎が哲学の専門的な知見を潜めつつ、『古寺巡礼』や「巨椋池の蓮」といったエッセイで試みた、融通無碍な文章世界に通じるものがある。

私は、箱根のポーラ美術館で、黒田清輝の「野辺」や岡田三郎助の「あやめの衣」の前に立つたびに、何故このような魅惑的な女性裸像の表現が可能になったのだろうと、その魅惑と美の根源を知りたくてならなかった。

その謎が、本書の後半にある「往還の軌跡——媒介者としてのコランとピュヴィス」で、ジャポニスムがコランへ、コランから黒田へとリレーの様子が、技法と様式の犀利な評釈によって鮮やかに解かれているのに感じ入った。

山内 昌之

ジャポニスム（日本趣味）はフランス美術史の広がりや深化を象徴するといっても過言ではない。三浦篤氏は、1867年のパリ万国博覧会で刺激されたジャポニスムが70年代にもっとフランスに広がる実相を明らかにした。東洋美術館にその名を留める実業家エミール・ギメの仏教美術作品もさることながら、ゴンクール『歌麿』『北斎』などは、フランスの美術評論の世界を大きく広げた。三浦氏は、ジャポニスムが発見の驚きや熱っぽい流行から、ビングや林忠正らの努力による落ち着いた受容と咀嚼の時代に入っていく有様も観察する。しかも、ポスト印象派に向かう19世紀フランスの前衛絵画は、ルネサンス以来の表現様式を刷新する際に、浮世絵版画などを「触媒」として使ったようだ。

ジャポニスムは、風景・人物・着物・陶磁器だけのものではない。文久3（1863）年6月の四国連合艦隊と長州藩との馬関戦争は、クリミア戦争のセヴァストーポリ攻防戦を描いたアンリ・デュラン＝ブラジェの手で絵にもなった。下関に来たこともない画家が雑誌などで得られた資料を基に長州藩

の攘夷を絵に再現したのである。現代の日本人にも日本史を外から対象化する視点をジャポニスムは与えてくれる。

さらにマネの海景画と歌川広重の「六十余州名所図絵」の比較は、三浦氏独自の視点によるものだ。マネによる南北戦争のシェルブール沖海戦の絵では、水平線が上部に置かれ海面もせりあがっている。この遠近法は頗る日本的なものだ。「土佐 海上松魚釣」は高い水平線、海面の広がりかつおと船の無造作な配置などのスケッチで、マネの海景画に大きな影響を与えた。さて、著者は黒田清輝の師 ラファエル・コランにおけるジャポニスム、黒田の絵画教育法についても斬新な見方を提示した。まさに『移り棲む美術』という書名は、美学・美術について独自の見方を示した和辻哲郎の名を冠した賞にふさわしい。